

素人小説

第7回「嫌な人間（やつ）」



株式会社 BSO

1 第7回「嫌な人間（やつ）」

- ・ 招かざる客
- ・ 人をけなす
- ・ 肩書きがなければ無能者
- ・ 自分を主張することの天才
- ・ 嫌々付き合うようになった
- ・ 人のセイにする
- ・ 未来のない人間との付き合い
- ・ 今日もまた

招かれざる客

初夏の日曜日、岡田は久しぶりに自宅の書齋でうたた寝をして過ごしていた。玄関先で庭いじりをしていた妻の史子の「石田さんが来られましたよ。」と言う声で目を覚ました。

遅い朝飯でビールを飲み書齋に入ったのが10時過ぎだったので、まだ1時間もたっていない。もう少し寝かせてくれても良いのにと思いながら、声にならないような声で返事をして立ち上がり、書齋を出て、石田のいる玄関に向かった。

事前連絡もしないで来た石田は、岡田が好んで会う相手ではなかった。むしろ史子が不在と言ってくれなかったことを恨めしく思っていた。

肩書きがなければ無能者

来訪者の石田節男は、今は生命保険の外交をしながら細々と生活をしている。もう倒産してしまっただが、かつては80名ほどの社員がいた中堅の熱処理会社の取締役生産本部長を務めた人間であった。倒産する前に退職した石田には、最初色々などころから再就職の声がかかった。取締役でもあったし、生産本部の最高責任者であったのだから、それ相当の技量があると思われるし、自分自身で

3 第7回「嫌な人間（やつ）」

も思っていた。

最初の転職先には、製造課長として就職したが、殆ど役に立たず、3カ月で退職してしまった。このときは、再就先が鉄工所であったため、業種が違うからだと周囲もあまり問題にしなかった。

次の転職先は、従業員40名ほどの同業の熱処理業で、製造部長として入社した。ところが、経営者と考えが違うと云って、1カ月も経たずに辞めてしまった。

その後2、3の会社を転々としたが、勤める先々で役に立たず、結局は追い出されたようになってしまった。所詮石田は、いわゆる年功で昇格した日本の幹部や管理者の典型であった。

嫌々付き合うようになった

岡田が石田と知り合ったのは、岡田の部下の不始末の処理のため、石田の所へ行った時からである。

その頃、岡田は親父が経営していた化学薬品関係の商社で営業課長をしていた。

石田の会社とは、あまり大きな取引はなかったため、担当者任せだった。岡田は上司であったが、石田の会社に行く機会はなく、その取引内容についても殆ど知らなかった。

担当者が新卒の山田に変わって間もないころ、いつも納めている商品とは違う商品が納品されてしまった。新人の山田が受注伝票に誤った商品名を記入してしまったのだ。

商品名がよく似ている上にパッケージも同じであったこともあり、出荷係も、また先方の資材や現場の担当者も気づかず、間違いが発見されずに使われてしまった。

当時その会社の資材課長をしていた石田は、損害は大したものではなかったが、色々と言実をつけ1,800万円の損害賠償金を支払うよう要請してきた。

この法外な損害賠償請求に新人の山田は驚くと共に怯え、すっかり落ち込んでしまった。

担当者に代わって、このクレーム処理に当たることになった岡田も、あまりの

無理難題に嫌気をさしながらも、誠意を持って対応した。

途中で石田は、岡田が経営者の息子で将来は経営を継ぐ人間であることを知った。それを境に、石田は損害賠償の請求を取りやめ、あっさりとは始末書で済ませてくれた。

これを機に色々と口実を作っては、石田は岡田に接触するようになった。岡田も当時のクレーム処理で世話になったことや、何かにつけて注文量を増やすよう凶てくれる石田を粗末に扱えない気持ちもあり、つつい付き合いを深める羽目になってしまった。

未来のない人間との付き合い

石田は悪賢い上に面倒くさいことが嫌いであった。また、将来に目標を持ち、それに向かって努力するようなことはしなかった。

石田の会社が得意先の倒産の煽りを受け、業績悪化したときでも、取締役生産部長として率先して難局に立ち向かうことはせず、さっさと退職金をもらって辞めてしまった。

また、石田は「いま」を楽しむ人間で、とにかく遊ぶことに知恵がよく回った。岡田はいつも石田の遊びの渦に巻き込まれ、いつも刹那的なひと時を過ごしたことを反省するといった後味の悪い思いだった。

人をけなす

石田が人を褒める話しを岡田は聞いたことがない。石田は人を褒めると損をするように思うらしい。

また、右田は、人の欠点を見つけたり、失敗を嗅ぎつける天才であった。そして、このようなことが出来る自分を秀才と思っていたようだ。

人の欠点や失敗に文句を言うことに快感を覚えるらしい。その度に周りの人々是不快となる。周りの人々が不快になるほど、石田は自分の才能を素晴らしいと自己評価していたらしい。

自分を主張することの天才

石田はこの世の中は自分のために存在し、回っていると思っている。周囲の人

への気配り心配りは石田にとっては別世界の話である。

周りで静かにして欲しい人がいようと、色々と用事をした人がいようと、お構いなしに自分の存在を押しつける。

ここまで徹底できる石田を岡田は羨ましいと思う反面、石田といると自分に腹立たしさを感じるようになった。自分の主体性がなくなるというか、存在が無視されるような思いに駆られるからなのだろう。

やはり、自分がこれだけ嫌なのだから、他の人もさぞかし石田の振る舞いについてとは同じように嫌だったのだらうと岡田は思う。人の存在を大切にすることが結局は人間として好ましい生き方だと云うことを、岡田は反面教師の石田から学んだ。

人のセイにする

石田は現在の自分の境遇が、自分が原因でそうだったとは思っていない。就職した会社が悪かったと思っっている。

岡田は石田と居ると、時々錯覚に陥ることがある。先日石田が運転する自動車に同乗したとき、横道から一時停止もせず本通りに出た。あまりにも当たり前と言った態度であったので、岡田は特に違和感を持たなかった。しかし、本通りを走っていた車にぶつかる羽目になった。

石田は車を止めるや「なぜぶつけたか」と大きな声で、相手の運転手の所へ走っていき怒鳴り込んだ。とにかくすごい剣幕であった。その勢いに岡田だけでなく、相手運転手の女性までもが、石田が被害者で相手が加害者であるような錯覚に陥ってしまった。

今日もまた

今日の石田の訪問は、岡田にとって決して嬉しいものになるとは思えなかった。今は専務になっている岡田の会社への入社を石田は狙っているようである。この間から、例の調子でしつこく迫っている。何となくはぐらかしている岡田に、今日は決着をつけようと思っっているのだろう。

今日もまた、石田とのひと時でどれだけストレスが溜まるかを考えながら、このような石田を可哀想に思う岡田であった。

おわり